「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

連載
常陸時代の佐竹氏
― 500年の軌跡を追う ―

【第17回】
蘆名・二階堂氏滅亡と「仙道」撤退

1　二階堂神社と松明あかし

東北自動車道須賀川ICを降りて福島県須賀川市へ入る。釈迦堂川を渡って市街地へ向かう。国道４号を通り越して県道６３号（石川街道）を東へ進むと、須賀川市役所が右手にみえる。その市役所前の信号を左折。街中の道を北方へ進むとすぐ左手に目指す二階堂神社（同市宮先町）がある。路地に面して「須賀川城址」の碑が建っている。１２段ほどの階段を上った上に鳥居がある。本殿は鳥居のすぐ後ろに鎮座している。

同神社は、中世、この地を治めた須賀川城主、二階堂氏を祀っている。本殿の場所が「須賀川城土塁跡」（須賀川市立博物館）とされる。鳥居の柱に「平成２３年３月１１日東日本大震災倒壊　平成２７年７月宮先町会再建」と書かれている。この時、ご神木１本が倒壊した。「樹齢約３００年」（同博物館）という残存の欅も倒壊の恐れがあるという理由で途中から切られている。

同市では毎年１１月の第２土曜日、同市内翠ケ丘公園の五老山で「松明あかし」と呼ばれる火祭りが開かれている。松明の火は、同神社で採火されたご神火を使う。須賀川城落城で亡くなった人々の霊を慰めるための祭りとされる。昨年は２０本の松明（長さ８㍍、重さ１㌧）と大松明１本（長さ１０㍍、重さ３㌧）に火がともされ、夜空に翳された。

2　摺上原の合戦と蘆名氏滅亡

天正１３年（１５８５）１１月、佐竹・蘆名勢などの南奥諸大名連合軍は、人取橋の合戦で伊達政宗を追い詰めた。しかし、同連合軍が「謎の陣払い」をしたため政宗は九死に一生を得た。しかし、正宗の南進策は止まらない。天正１７年（１５８９）６月、「蘆名義広は父佐竹義重・義重の甥岩城常隆および相馬常胤の軍と岩瀬郡須賀川に会し」（『会津若松史第１巻』）、伊達勢を攻める体制を整えた。

奥州の雄・蘆名氏は天正１４年（１５８６）、当主の亀若丸が病死。後継当主に白河城主で、佐竹義重の二男白川義広が入った。これにより「蘆名・白川・佐竹の連盟は破（堅）固不抜のもの」（『福島県史第１巻』）となっていた。ところが、伊達に攻め入ろうとした矢先、須賀川の義広のもとに蘆名一族の猪苗代盛国が政宗に寝返ったという知らせが届いた。義広はその日のうちに夜を徹して居城・会津黒川城（会津若松市）に戻った。

磐梯山山麓の摺上原が決戦場となった。福島県耶麻郡猪苗代町と磐梯町にまたがる地域である。『磐梯町史』は戦いを次のように分析している。「お互いに忍びの者を使っていたであろうが、開戦の間際まで猪苗代盛国の内応さえ知らなかった芦（蘆）名義広であるからその点だけでも政宗に劣っていた」と。『佐竹家譜』は天正１７年「６月１０日条で「芦（蘆）名義広其一族諸臣内応に因て伊達政宗の為に黒川出城。常州に帰る」と記している。

3　須賀川城落城と二階堂氏滅亡

奥州の雄、蘆名氏の滅亡は同盟関係にあった佐竹氏にとって大きな痛手となった。佐竹氏２０代当主義宣は天正１７年６月、すぐさま白河城主に復帰していた白川義親に起請文を出し、「同盟の保持を約束」。佐竹一門の東義久は南郷の安藤肥前守に書状を出し、南郷惣之足軽いつものごとく催促」（『塙町史』）という対応策を取っている。対する政宗も白川義親に起請文を与え、同盟関係構築を画策している。

こうしたなか米沢城（山形県米沢市）から会津黒川城に居城を移した政宗が須賀川城攻めに動き出した。『須賀川市史』が興味深い指摘をしている。「政宗の作戦の特徴は必ず敵の中に内応者、寝返り組を作ることといってよく、成功した戦いには決まってこの手が用いられている」と。須賀川城主は亡き二階堂盛義の妻、阿南である。阿南は政宗の叔母にあたることから戦を避けて降伏するよう何度も政宗から求められた。

しかし、阿南は降伏の要求をはねのけ、佐竹氏

や磐城氏の加勢を得て戦う道を選んだ。しかし、ここの戦いでも政宗に通じる内応者が出た。『須賀川市史』は「味方の危機に際して老臣守谷筑後守かねてよりひそかに政宗に内応し、腹心の家臣織部と金平という兄弟の者に命じて火を風上に放った。（一部略）焔（ほのう）は四方に飛び火し軒を連ねた屋形は瞬時の間に焼け落ちてしまった」と書く。こうして須賀川城は落城する。

4　仙道からの撤退と南奥死守

二階堂氏の滅亡によって佐竹氏が中核にいた南奥諸大名連合軍は壊滅状態に陥った。白川氏は伊達氏の勢力下に組み込まれた。石川城（福島県石川郡石川町）の石川昭光（あきみつ）も政宗に服属した。次々に政宗の軍門に下る在地武将が出るなか佐竹義重、義宣親子は南奥死守の体制に入った。特に重視された拠点が「三ケ城」と呼ばれた南奥の城である。『塙町史』はその三ケ城を「赤館・寺山・羽黒であろうか」とみる。

この時期、佐竹勢最北端の属城は船尾昭直（ふなおあきなお）が守る滑津（なめつ）城（福島県西白河郡中島村）だった。天正１７年１１月、伊達側の田村勢が押し寄せ、船尾氏は防戦に努めていた。明けて天正１８年（１５９０）１月、義宣は伊達氏に寝返った白川義親を討つため白河へ出陣した。白河城は仙道を取り戻すための入口にあたる。伊達側からみれば南奥攻めの入り口である。双方、必死の攻防戦が展開された。

しかし、この時期、中央の政治状況は大きく変わりつつあった。天正１８年３月、豊臣秀吉が大軍を率いて京都を立った。向かう先は後北条氏の居城、小田原城である。その後、後北条氏側の属城が次々と落されていく情報が石田三成（みつなり）から義宣のもとに届けられた。政宗と対陣中ながらも、ついに義宣は決断した。「義宣は参陣の意志を一層固め、５月下旬、宇都宮国綱（くにつな）とともに小田原へ向かった」（『常陸太田市史通史編上巻』）のである。

5　蘆名義広のその後と角館

天正１８年は時代が大きく動いた年だった。地方が地方だけの理由で動く時代は過ぎ去っていた。佐竹氏はそれを「沼尻（ぬまじり）合戦」で思い知らされている。義宣の白川氏攻めを途中で切り上げた理由もそこにあったのかもしれない。それにしても仙道争奪戦の渦中、４００年の統治に幕を下ろした族がいる。戦国大名蘆名氏である。その最後の当主が義宣の弟、義広であった。その義広について『常陸之佐竹』（２０２２年常陸佐竹研究会発行）「１０号」で「かくのだて歴史案内人組合」の戸澤嗣郎氏が以下のように書いている。

「義宣は敗残の弟を優しく迎え、面倒をみてやった。戦国の世の習いとはいえ七歳で白河（川）に養子に出され、十五歳で蘆名へ移され、ボロボロになって帰ってきた。豊臣秀吉の配慮で弟を江戸崎城の城主にしてやった。しかし、兄の秋田移封に伴って義広も秋田へ移った。秋田藩主となった義宣は弟を角館城主にしてやった。１万５千石である。会津７０万石のかつての蘆名を思うと情けない。何として昔の栄光を取り戻したい」

元和元年（１６１５）、江戸幕府は一国一城令を発令した。名を義勝と改名し、蘆名家隆盛を願って義勝は角館の再生に取りかかった。「蘆名家臣の人心を一新し、再出発するためである。義勝は優秀な都市プランナーであった。それが現在の角館町である」。義勝は再興に備え城下を整備した。武家屋敷が整然と立ち並ぶ街並みはこうして造られた。しかし、義勝の思いも空しく、蘆名家は断絶となった。武家屋敷がその無念さを今に伝えている。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
冨山　章一

須賀川城の土塁跡に鎮座する二階堂神社＝福島県須賀川市宮先町。